

(肝属郡東申良町川西西牟田)

位置と環境

東申良町は大隅半島の中部東岸にあたり、東に志布志湾、南に肝属川と国見山系があり、北側及び西側はシラス台地につながっている。

遺跡は、町の中心部より東南へ約1kmの標高6～7.5mの水田に位置し、肝属川に合流する申良川の東岸微高地にあり、これらの河川で浸食された緩やかな傾斜地に立地している。

この遺跡の周辺には、南側に本県でも最大規模の唐仁古墳群、肝属川の対岸には塚崎古墳群や岡崎古墳群などがみられる。

調査の経緯

遺跡は平成元年の農地整備関係の分布調査で発見された。東申良町教育委員会が調査主体となり、平成3年度に低コスト化水田大区画圃場整備事業西牟田地区整備に伴う調査を、鹿児島県教育委員会の協力を得て平成3年11月26日～12月10日までに本調査を実施した。

遺構と遺物

本遺跡は、弥生時代中期から後期初頭にかけての集落遺跡である。

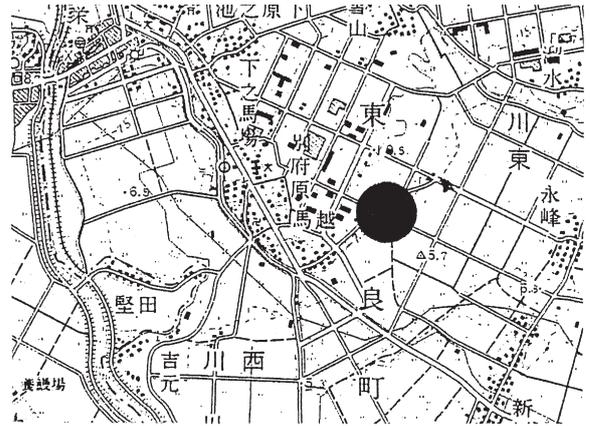
平成3年の調査の結果、層序は基盤の砂漠まで12層を確認し、遺物包含層は5層下部より6層で、遺構は7層で検出した。

遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑1基が検出されている。

竪穴住居跡は南北4.7m、東西5.5m、深さ50～60cmを測り、方形を呈している。上屋の支える支柱穴は2本で東西にあり、中央に炉跡と思われるピットがみられる。東西には棚を付けたと考えられる小ピットが南北に2列みられる。この竪穴住居跡の埋土は第5層の暗紫コラが最下部に、その上に紫コラがレンズ状に堆積していた。

土坑は南北1.2m、東西1.5m、深さ15～20cmで2段からなる形状を呈している。

遺物は、弥生中期末から後期初頭にあたる山ノ口式土器が出土している。甕形土器は口縁部がL字に



第1図 西牟田遺跡の位置

近い「く」の字状の形態を呈し、壺形土器は、断面三角突帯を胴部に施すもので、L字口縁や二叉口縁を持つ断面三角突帯及び断面M字状突帯を施すものが中心である。このほか、丹塗磨研土器で袋状口縁をもつ小型の長頸壺が完全な形で出土している。

土器のほかは、土製曲玉や軽石製品等が出土している。

特徴

南九州の弥生時代中期の様相を示し、北部九州系の袋状口縁長頸壺が出土している。このことから弥生時代の文化の交流があったと認められる遺跡である。

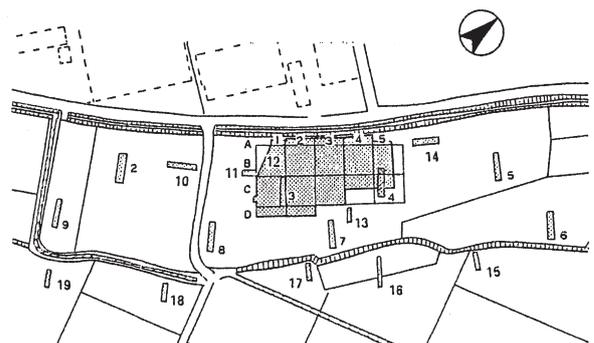
資料の所在

出土遺物は、東申良町教育委員会・鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

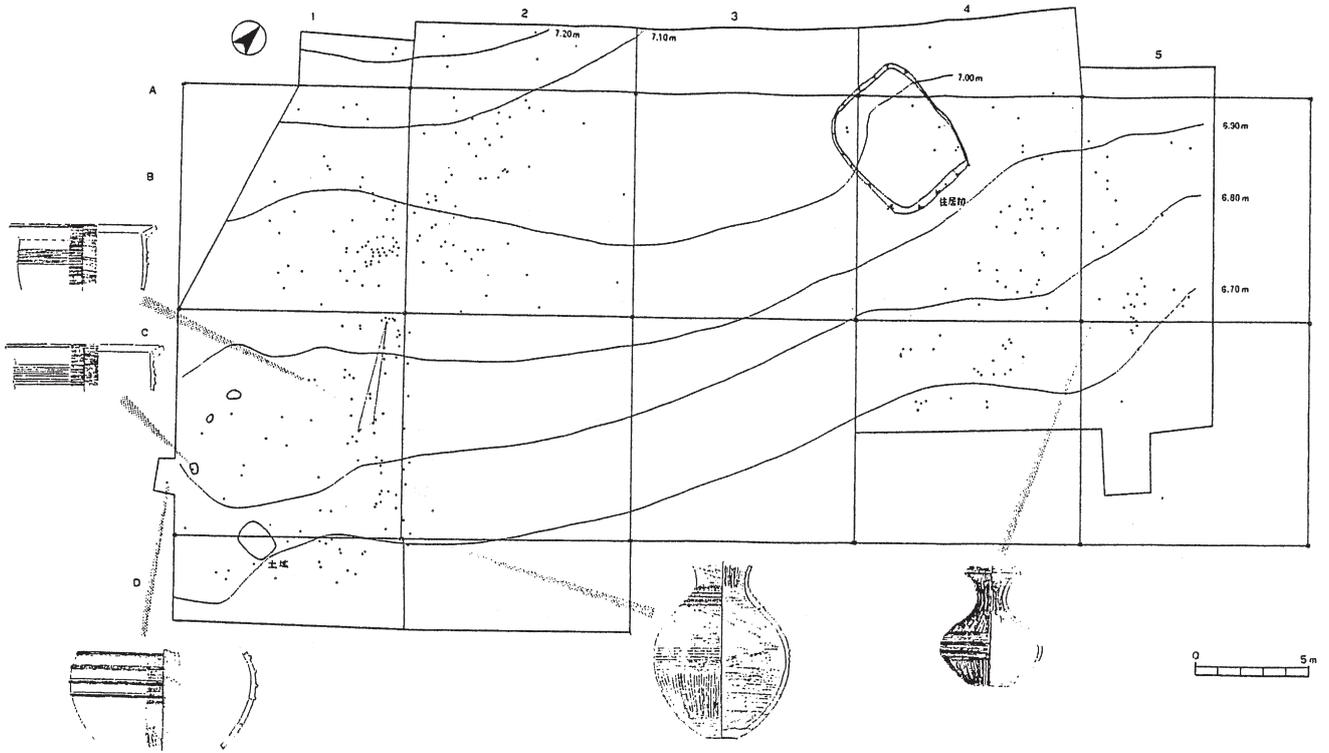
参考文献

東申良町教育委員会1993「西牟田遺跡（付唐仁132号墳）」『東申良町埋蔵文化財発掘調査報告書』4

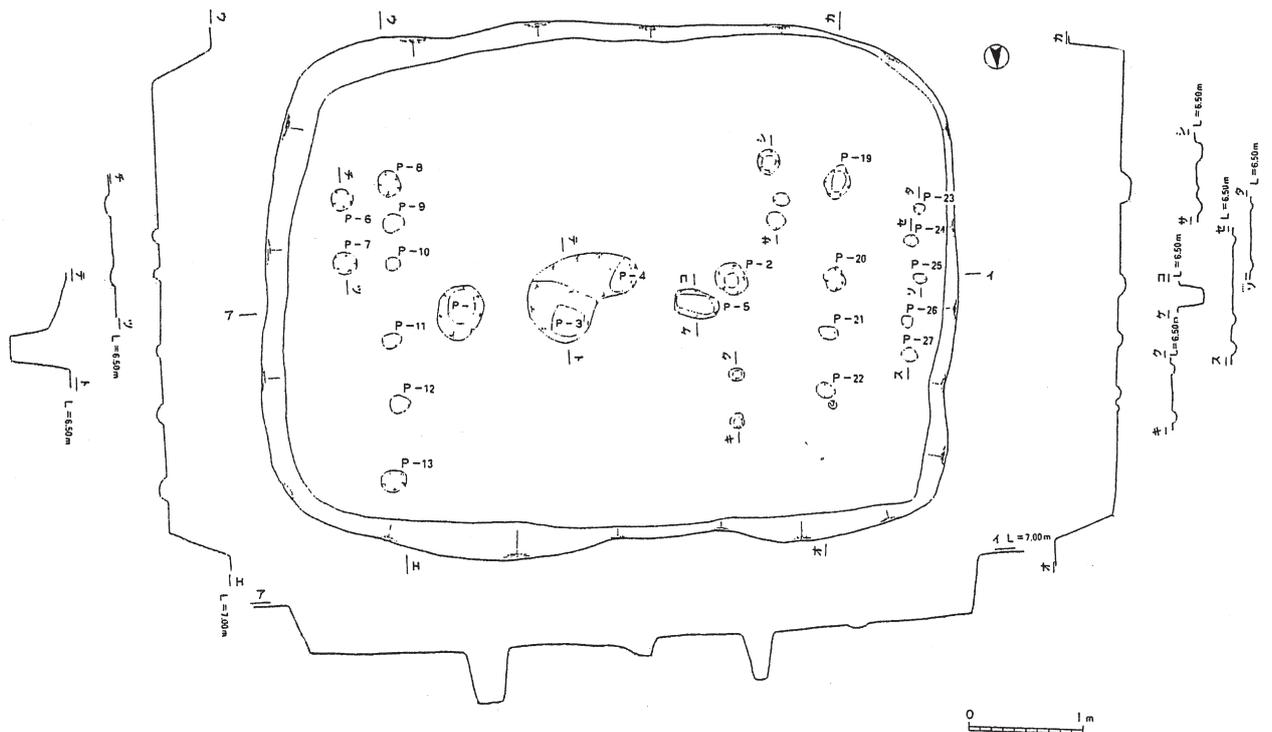
(彌榮久志)



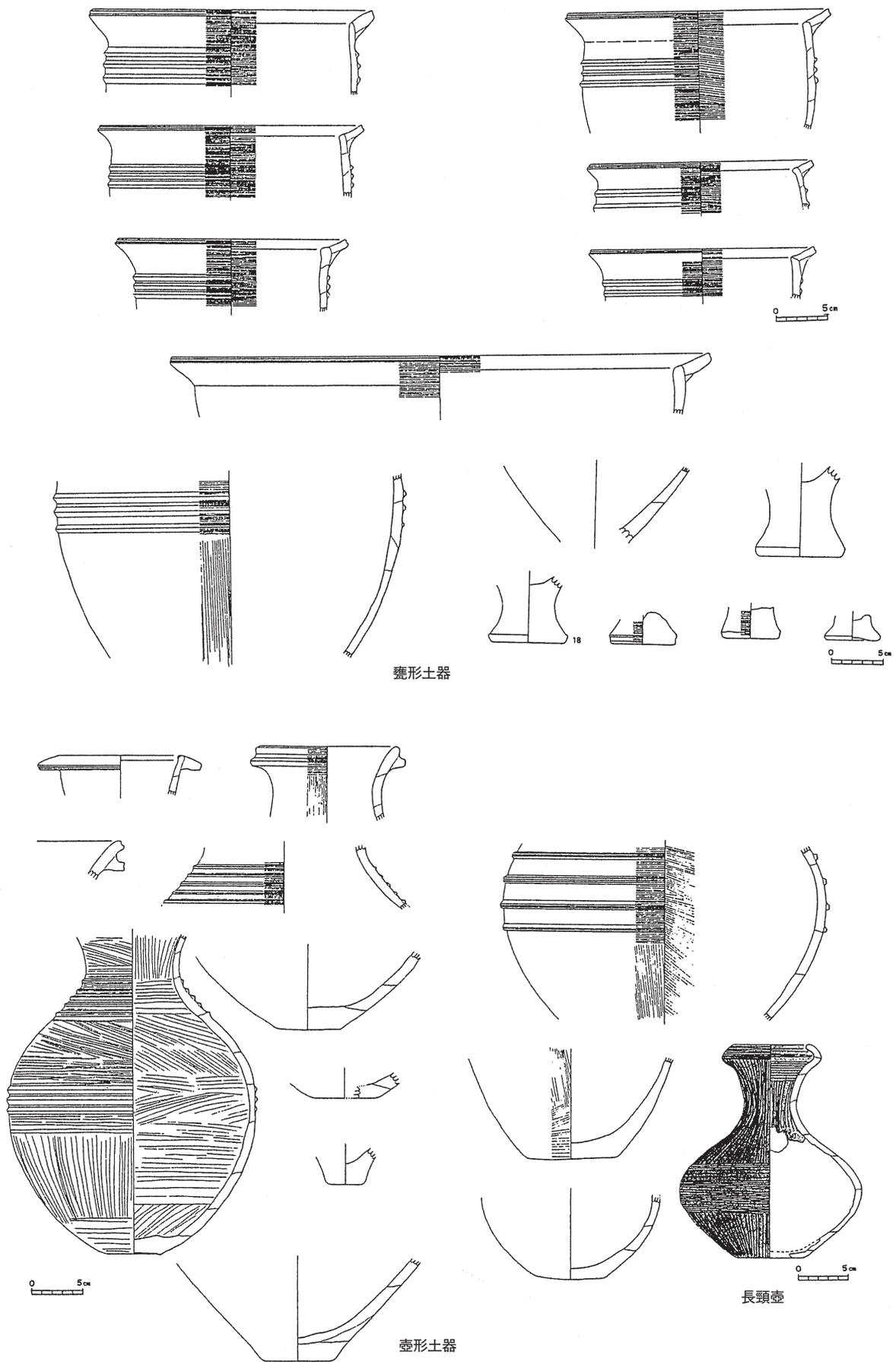
第2図 西牟田遺跡の調査区



第3図 西牟田遺跡の遺構と出土遺物



第4図 西牟田遺跡の竪穴住居跡



第5図 西牟田遺跡の出土遺物